

# 産業のバランスよい発展で 日本の環境首都を目指す

## 自転車ですすきをつないだ 環境への思い

今年の8月11日、静岡県掛川市で「第2回中部環境先進5市サミット」が開催された。出席都市は第1回と同じく愛知県安城市、新城市、長野県飯田市、静岡県掛川市、岐阜県多治見市の各市長だった。今回は同サミットに先駆ける形で、第1回の開催地・安城市の神谷学市長が開催市のリレー用たすきを自らの肩に掛け、安城市役所から第2回の開催地・掛川市役所までの約14.2kmを自転車で走破するプレイベントも行われた(7月9日)。

「中部環境先進5市サミット」という会議の存在と、その目的の重要性をより多くの方々に認知していただきたいという一心で、炎天下を汗だくになりながら走り通しました(笑)。また途中、新城市を通過するときには新城市の穂積亮次市長からよく冷えた完熟トマトの差し入れをいただき、到着時にはやはり自転車に乗った掛川市の松井三郎市長をはじめ、職員の方々にお出迎えいただくなど、暑い中、たくさんの方々をお付き合いさせていただき、結果となりました。それでも何とか無事にたすきをリレーできて、前回開催地としての使命を果たせたかなと思いました」

たすきにこだわったのは、中部環境先進5市の頭文字を並べると多治見市「T」、安城市「A」、新城市「S」、掛川市「K」、飯田市「I」、すなわちTASKIになるからだとも語る神谷市長の、学生時代以来続けてきた趣味は登山だ。平成19年度に安城市が自転車利用を促進する「エコサイクルシティ計画」を策定してからは、自転車も趣味の一つに加わった。同様に環境先進市として飯田市、掛川市、新城市などもさまざまな形で、自転車を市内交通の重要な乗り物として位置付けるまちづくりを展開している。

そもそも同サミットへの参加都市がそれぞれに共有する、自転車に対する関心の深まり

ら2010年までの10年間で開催された、持続可能な地域社会の創造とその啓発を目的とする民間主催のコンテスト事業だ。参加自治体は環境に関する15分野80項目において主催者の厳密な採点を受け、総合点で結果が競われた。

同サミットに参加する5市はいずれも、この日本の環境首都コンテストに継続参加し、好成績を挙げてきたという共通点がある。日本の環境首都コンテストは昨年終了したものの、熱意は冷めやらず、中部地方において今後も都市間交流を多角的に進めつつ、真の環境首都の創造を目指し、連携していきたい、中部環境先進5市サミットはそのような趣旨・総意で発足した。

「今回のサミットでは前回開催時点との間に東日本大震災、それに付随して発生した原発事故という未曾有の事態が重なったこともあり、議論はより白熱しました。東日本大震災が災害防止や災害からの復旧対策、環境・エネルギー施策の大きな契機となるのは確実です。それを成し遂げるためには市民の最も身近な行政機関である私たち地方自治体のより積極的な決断力と行動力が求め



「第2回中部環境先進5市サミット」記念のたすきがけリレーで安城・掛川間を完走した神谷市長

る。たすきをリレーできて、前回開催地としての使命を果たせたかなと思いました」

車に乗った掛川市の松井三郎市長をはじめ、職員の方々にお出迎えいただくなど、暑い中、たくさんの方々をお付き合いさせていただき、結果となりました。それでも何とか無事にたすきをリレーできて、前回開催地としての使命を果たせたかなと思いました」

### 安城市と周辺地域が 日本デンマークと呼ばれるわけ

安城市には大正末期頃から昭和20年代まで、デンマークのような農業先進地という意味合



「第1回中部環境先進5市サミットin安城」にて(左から新城市長、多治見市長、安城市長、飯田市長、掛川市長)

「日本デンマーク」という呼称がしばしば使われ、昭和30年代から40年代まで広く知られていた。その端的な名残は矢作川から水を引き込んだ総延長50km以上にも及ぶ農業用水「明治用水」(明治12年着工、翌13年に主要部分完成後も明治18年ごろまで断続的に開削継続)となつて今も残されている。明治用水は現在も用水として利用されているが、そのほとんどは暗きよ化され、暗きよ化された約36km分は明治用水緑道としてサイクリングロードおよび歩道に活用されている(詳しくは後述)。

この明治用水は、正確には安城市を中心に、一部は知立市、刈谷市、高浜市、豊田市、碧南市、西尾市にまで広がる。従って前述の日本デンマークという呼称も、安城市を中心としたこの明治用水の恩恵を受けて豊かな農業地帯を築いた周辺地域も含むわけだが、現在の地

がく学  
かみや  
神谷  
安城市長



は、同サミットが誕生するゆえんともなった「日本の環境首都コンテスト」の存在に由来する。十全な維持の難しい地方都市における公共交通の欠落部分を補うという意味合いだけでなく、環境保護を大きな柱とするまちづくりを突き詰めて考えたとき、市内交通の手段としての自転車はいろいろな意味で合理的だからだろう。

「日本の環境首都コンテスト」は10以上の環境NGOが連合してつくった環境首都コンテスト全国ネットワーク(現・環境首都創造NGO全国ネットワーク)の主催で、2001年か



安城の七夕まつりは日本3大七夕まつりの一つ

竣工式典では、駐日大使の尽力もあってコリ  
ング市（デンマーク）との友好都市提携が締結  
された。  
また平成21年5月には、同年12月に、同国  
の首都、コペンハーゲンで開催されたCOP  
15のプレイベントとして、駐日デンマーク大  
使が日本の9都道府県を自転車でつないで走  
る「COP15サイクリングツアー」がデンマー  
ク大使館主催で実施された。その際には東京  
からの最初の中継点に安城市のデンパークが  
選ばれ、老若男女の市民（もちろん神谷市長  
も）が大使とともにサイクリングを楽しみな  
ど、デンマークと安城市の交流はますます密  
接になりつつある。中部環境先進5市サミッ  
トのプレイベントとして、神谷市長が自転車  
で掛川市まで走破した企画のヒントの一つは、  
そこにあったのかもしれない。



親子連れやカップルでにぎわうデンパーク誕生の背景に  
は安城市の農業の歴史の蓄積

図上の区分で市域が丸ごと入っているのは安  
城市だけ。中心地であることは明らかだろう。  
「愛知県といえば全国でも別格の製造品出荷  
額（平成21年の『製造品出荷額等』は約34兆円）  
を誇ることから、トヨタなどの自動車産業を  
はじめとする工業地帯のイメージが非常に強  
いと思われがち。実は明治時代から続く農業  
地域（平成20年の『農業産出額』は約3210億  
円で全国6位）でもあるのです。中でも矢作川  
水系および明治用水を活用した本市とその周  
辺は今も田畑が多く、初めて来られた方は皆  
さん、イメージとの違いにかなり驚かれるよ  
うです」（神谷市長）  
例えば平成21年の安城市の「製造品出荷額  
等」は、リーマンショック後で急激に下落した  
とはいえ約1兆2600億円ある。「農業産出  
額」も平成18年で約96億円（畜産・耕種などは  
除く）だが、小麦・大豆・きゅうり・イチジク  
の作付面積はいずれも愛知県内第1位、水田

面積も同2位で、豊かな田園風景を今に残し  
ている。

安城市の市制施行は昭和27年、来年には市  
制施行60周年の節目を迎える。余談になるが  
市制施行以来誕生した6人の首長は、現職の  
神谷市長（東京農業大学を卒業後は一時就農）  
も含め、実は全員が農業関係出身の人材だ。  
自動車産業をはじめとする工業化が昭和40年  
代から激化していった中で、なおかつ、明治時  
代からの地場産業の要として、産業の経済的  
規模こそ違い、現在も工業とともに元気に2  
枚看板を張り続ける農業への、地域の人々の  
思いの強さがそんなところからもしのばれる。

安城市内にはデンマークをモチーフにした  
テーマパーク「安城産業文化公園デンパーク」  
（名称は公募。デンは「日本デンマーク」のデン  
であると同時に田園と伝統のデンであり、公  
園IIパークを組み合わせた名称）がある。平成  
9年の開場以来、四季折々の花が絶えない、  
緑と食とメルヘンの楽園と  
して安城市のシンボルとも  
いべき位置を保ち続ける  
公園で、園外に隣接する形  
で地域の物産が豊富にそろ  
う「道の駅デンパーク安城」  
も設置され、市内・近隣か  
らの格好の日帰り観光地と  
しての人気を保っている。  
「さすがに開場当初の年  
間100万人という人出は

## 環境首都を目指す安城市の原点も デンマーク農業

既に触れたように、あらゆる観点からでき  
る限りの環境保全を実施しながら都市として  
の無理のない発展をも同時に目指す環境首都  
という都市像を目指す安城市の方針は、NG  
Oが主催した「日本の環境首都コンテスト」へ  
の参加から始まった。

しかし、それよりはるか以前の幕末に計画  
された用水開削計画が明治10年代以降、次々  
と一連の明治用水となって実現されていき、  
現・安城市を中心とする旧碧海郡一帯は大正  
末期に至り、ついに「日本デンマーク」と称され  
るほどの豊かな農業地帯となっていた。地域の  
先人たちは、悪戦苦闘の末に「まさに荒地地に  
花を咲かせた」（神谷市長）わけだ。田園地帯と  
しての日本デンマークの質量（作付面積や畜産  
なども含む農業生産量）は、恐らくこの  
1930年代〜1940年代がピークで、戦後  
に工業化や都市化が急速に進み始めてからは、  
まず畜産が脱落するなど、工業化や都市化と  
共存する形での新しい「農業の形」が模索され  
ていくことになる。実はそのプロセスにおい  
て、環境へ配慮する心が地域の就農者たちには  
は自然に形成されていった様子がうかがえる。  
今回の取材でお話をうかがった神谷市長や  
市職員の皆さん、安城市とその周辺地域の農  
業の歩みを知る方たち（デンパーク職員など）  
は一様に、「日本デンマークというの今は昔



明治用水の上部を活用したサイクリングロード（自転車歩行者専用  
道路）

望めませんが、それでも年間50万人前後のお  
客さまを今も集めておりますし、今後のソフ  
ト面での改善・努力次第ではまだまだ伸びる  
余地のある施設だと期待しております」（神谷  
市長）

安城市とその周辺地域が日本デンマークの呼  
称の下、大都市圏には珍しい農業地帯を形成  
してきたことは既に述べた。しかし、当のデン  
マークの人々には、日本の中部地方に「日本デ  
ンマーク」と呼称される農業地帯があることは  
近年までほとんど知られていなかったという。  
だが「安城産業文化公園デンパーク」の基本  
計画策定（平成4年）および名称決定（平成5  
年）の時期を契機に安城市と在日本デンマーク  
大使館との交流は密接になり、平成7年には  
当時のデンマーク駐日大使が安城市を訪問。  
平成9年4月29日のグラントオープン直前の

で……」と話し始める。しかし「日本デンマ  
ーク」という呼称を口にするときの語調の底に  
は、常に「地域の農業が成し遂げ、今も続いて  
いる歩みに対する密かな誇り」が感じられたの  
も事実だ。それはなぜなのかと考えたとき、  
自然に結びついてくるのが、農業を通して、最  
も今日の環境への配慮を安城市の農業の先  
人たちは、既にさまざまな形で実施してきた  
という、前述のような経緯だった。

日本デンマークと呼称されるようになって以  
降、安城市は常に農業先進都市のモデル地区  
（集団営農システムの導入など）として国からも  
位置付けられてきた経緯がある。工業化や都  
市化の希求という時代背景の中で、いかに農  
業が地域と健全に共存していけるかという  
テーマの下に行われた各種取り組みも、全国  
に先駆ける形で実施されたものが多かった。中  
でも「例えば明治用水の絶えざる改良工事の持  
続や、水質保全を目的とする水利組合などに  
よる山林買い取り事業および矢作川源流域の  
買い取り事業などが、戦前戦後を通じて、国  
にいわゆる前に常に地域で意識されてきたこ  
と」（神谷市長）などは特筆に値する。健全な農  
業には健全な自然環境が大切なことに早くか  
ら着目し、さらに水質保全には源流域からの一  
貫した保護政策が必要だと考え、実行に移し  
てきたのだ。つまり戦後いち早く、農業と環  
境問題を突き詰めて考えてきた歴史が、安城  
市とその周辺地域の農業地帯にはあったのだ。  
車で市内を案内していただいたとき、職員

員への自転車通勤の勧めを説き、受け入れてもらったというから素晴らしい(そのケアの環境として名鉄の新駅の建設に向けて努力するなど、公共交通の整備という最大のバックアップもしている)。また市役所職員も近隣職員は自転車通勤が奨励され、市長も格別の理由がない限り基本的に愛用の自転車で通勤している。

こうした「しくみづくり」や「意識づくり」に市役所や大手企業が率先して連携する姿勢からは、明治用水を生かしたサイクリングロードの充実や豊富な駐輪設備の設置などの「空間づくり」と相まって、環境首都を目指す安城市におけるエコサイクルシティ計画の位置付けの重要性がうかがえる。

また安城市は来年、市制60周年の節目を迎えるが、そのメインテーマは「紡ぐ」だという。日本デンマークと呼ばれた農業先進都市とし



市制60周年(平成24年)を記念してリニューアルしたマスコットキャラクターのサルビー(市の花サルビアがモチーフ)は子どもたちに大人気



市内に多く見られる田園風景。右の建物は安城更生病院

がある場所で車を止め、「実はこれが、安城市の最も理想とする風景の一つなんですよ」と晴れ晴れとした声で言った。

目の前には広々とした野菜畑があり、その向こうには安城市民にとって頼りになる先端機能満載の総合病院・安城更生病院の堂々たる建物群やマンション群などがある。背後を振り返れば野菜畑の向こうに安城市リサイクルプラザが稼働している。

日本デンマーク＝安城市の歩みを知らなければ、それらは田園風景の中に都市化の波が侵食しつつある光景のように見えてしまいかねない。だが大変な苦労の後に完成した明治用水が通水120年後の今も豊かな農業用水として生きつつ、市民憩いのサイクリングロードにもなり、さらに用水の大本である矢作川をさかのぼれば、用水管理組合をはじめとす

る地域の人々の運動によって獲得された計約528haもの広大な水源涵養林があることを知った今、なるほどこれはいかに、都市化および工業化と共存する現代の日本デンマーク＝安城市らしい風景。人の暮らしに必要な施設や各種機能が、豊かな田園の中に隣接し合い、溶け込んでいるのだと、深く納得したのだ。



放置自転車がほとんどない理由の一つは豊富な自転車駐輪場の存在(JR安城駅前)



放置自転車を丁寧に整備し、ノーバンクタイヤまで履かせた安城市自慢のレンタサイクル

## 自動車産業のまちを吹き抜ける 銀輪の風

取材の最後に安城市ご自慢のレンタサイクルで市内をあちこち回った。放置自転車をきれいに整備し、塗装し直し、タイヤをノーバンクタイヤに交換したもので、普通に新しい自転車を買える費用が掛かっているという。それなら新しい自転車を買った方がいいという意見もあるだろうが、これによって元々それほど多くなかったとはいえ、放置自転車がほとんど消えたという効果は捨てがたい。

さらに指定のポートならどこから乗って、どこで降りても自由というシステムにあえて放置自転車を活用し、新車と同等以上の整備費を掛けるという姿勢は、単なる「もったいない精神」の発露だけではない、道具はもうこれ

以上は使えないというところまで使うべきだという美学の領域というべきだろう。

それとは別に、自前の自転車を買いたいという市民には助成金システムももちろん各種用意されている。市内の指定自転車店では同時にリサイクル自転車の販売も行っているのだ、安城市民にとっての自転車環境は非常に多彩だ。

平成19年度から取り組みが開始された「エコサイクルシティ計画」(平成26年度)では、「意識づくり」「空間づくり」「しくみづくり」が基本方針とされているが、それらはまさに「しくみづくり」の一環といえる。

また「意識づくり」では「自転車利用促進に向けたきっかけづくり」や安全意識、マナーなどの周知徹底がさまざまな機会をとらえて実施されている。これに関して神谷市長は「自動車産業のまちだからこそ」という発想で、市内立地の大手自動車関連メーカーに隣隣在住の社

での歩み、昭和30年代以降の工業都市としての歩みなど、歴史がつむいできた事象を改めて学びながら、市民と行政が一丸となつて心をつむぎ未来のまちづくりにつなげたい。さらに未来を担う子どもたちが明るい未来を信じていけるような息吹を育てる。そんな夢をつむぎたい。同時に3月に起こって以来、日本人の価値観を根底から揺さぶった東日本大震災以降の被災地の復興に関し、すべての日本人が心を一つに、被災地の人々とともに小さなことから1つ1つつむぐように、失われたものを再構築していこうというエール。メインテーマの「紡ぐ」にはそうしたもろもろの願いが込められているようだ。

「60周年記念事業については、目下、補助金付き事業として、市民が主役の事業を企画していたできるように公募しております。その結果は最終的に、市民によるプレゼンテーションと審査を経て決定しますが、どのような企画が生まれてくるかがとても楽しみです。同時に市の方でも『新美南吉にちなんだまちづくり』などを計画しているところです」(神谷市長)

新美南吉はご承知のように、『こん狐』や『牛をつないだ椿の木』などの鮮烈な作品で知られる童話作家だが、29歳の若さで亡くなっている。半田市出身の南吉は、そのわずか29年の生涯の最後の青春時代5年間を、安城高等女学校(現安城高校)の教師として過ごしている。



新美南吉の通勤路だった中心市街地の店舗壁面やシャッターに描かれた、南吉童話をイメージした絵

安城市市制60周年の翌年は、新美南吉の生誕100年を迎える。安城市周辺には現在も、南吉の教え子たちが80代の長寿を迎えて暮らしており、安城市は南吉ファンの若い読者からも、半田市とともに「南吉の聖地」として知られている。

安城市の「新美南吉にちなんだまちづくり」は少しずつ姿を見せはじめている。安城市周辺が日本デンマークと呼ばれるようになる直前(大正2年)にこの世に生を受け、農業地帯としての日本デンマークが脂の乗り切った時期(昭和18年)に、安城高等女学校の教師としてこの世を去った新美南吉が、当時の安城市の景観や人々の営みについて残した文章があればぜひ読みたいものだ、心から思う。そこにはもしかすると、日本デンマークとしての歴史的な営みをベースに、環境首都としての新たな飛躍を目指す安城市の「これから」を考えるのにふさわしい何らかの啓示が潜んでいるのではないか。

(取材・文 遠藤 隆)